

俺の現場!

大槌漁港施設機能強化 (スロープ道路)工事

今回ご紹介するのは、大槌漁港施設機能強化(スロープ道路)工事を担当しているDさん。

初めてのスロープ工事で注意を払ったポイントや、今後目指したい姿についてお聞きしました!

宮古事業所 工事長

K.Dさん

大槌漁港施設機能強化(スロープ道路)工事

工期 2021年1月～3月
場所 岩手県上閉伊郡大槌町
人数 多田工務店5名、全体10名

「淡さも仕事も超一流!なDさん」と聞いていますが、ご自身のどんなところがそう呼ばれる理由だと思いますか?

話すことが苦手なので、その裏返さゆえの「淡さ」という評価かもしれません(笑)仕事についてはベテラン社員の皆さんに比べればまだまだですが、これから「超一流」の域を目指したいと思います。



初めてのスロープ工事

私にとって、スロープ工事を担当したのは初めてでした。特に心がけたのは、仕上がりの美しさ。表面が凹凸なく平らになるよう、生コンクリートの打設の際にパイプレーターを細かく動かしながら、まんべんなくかけるようにしました。その甲斐あって、気泡が綺麗に抜け、滑らかな仕上がりにできたと思います。



今回は、\年齢は若いけれども親分肌な/
T.Iさんの現場「詠石橋橋梁災害復旧工事」の様子をお届けします!お楽しみに!

知人にも「細かい性格だね」と言われたことがあるので、こうした作業に向いているのかもしれません(笑)

6年目でも「毎日が勉強」

多田工務店に入社して現在6年目ですが、打設作業も工事長としてのスキルもまだまだ初心者で、毎日が勉強です。今回の現場には工事長として入りましたが、周囲の人への気配りや人間関係を構築する難しさを改めて感じました。その点、当社のベテラン社員の方々は、誰がどこで今何をしているかを現場の隅々まで把握し、その時々的確な指示や助言をされるので、本当に尊敬しています。そのような「気配り、目配り」ができるようなベテラン社員を目指して、これからも頑張りたいと思います。



ベテラン社員が語る

多田工務店の歴史

知られざる多田秀樹前社長の姿や、約30年前の多田工務店の様子。ベテラン社員のお二人に「あのころ」を語っていただきました。



専務取締役

いちくらののびる
一倉昇さん



▲若き日の一倉さん(1991年)

人を大切にする 多田秀樹前社長の姿

平成元年の多田工務店設立当初、社員数は50名ほど。毎月皆で前社長の大好きなジンギスカンを食べに行き、労をねぎらうなど、社長と社員との距離は友人のように近いものでした。そうした日々のコミュニケーションを通じて一人ひとりの得意な分野をよく理解され、それを生かす形で仕事の幅を広げてられました。また、「会社のもので自分のものだと思って大事に使えよ」とも教え込まれました。前社長は「人に恵まれた」とよく仰りますが、人やものを大切にしてきたからこそ、会社も大きくなったのだと思います。

人手が足りない中、 がむしゃらに働いて完遂した大型案件

設立後間もない頃、岩手県金ケ崎町にある富士通株式会社の工場の二期工事を担当。毎日8時から21時までという激務でしたが、「この案件をきっちりやり遂げ、会社の実績にするんだ」という使命感があったからこそ、がむしゃらに頑張ることができたのだと思います。一緒に働く方々は父親のように年齢が離れていましたが、お酒の席で腹を割って話すことで打ち解けていきました。

社員の皆さんへメッセージ

皆さんやればできる方々だと信頼しているので、一見「できない」と思えるような大変なことでも、諦めずに頑張ってもらいたいと思います。このような立派な会社を次世代に引き継いでいくには、若い皆さんの力が必要です。私も力になれるよう努めますので、ぜひ頼ってください!



監査役

ただ
多田サヨさん



▲多田秀樹前社長(1991年)

知られざる 前社長の若き日の姿

子供のころから気が強く、言い出したら一歩も引かない子でした。どうしても欲しいと言うので、高校卒業後に遠野市内の設計事務所に勤めていたときに750ccのバイクを買ってあげたり、フォルクスワーゲンのビートルも買ってあげたりしました。あるとき、間違って「フォルクス『パー』ゲン」と言ってしまう、すごく怒られたことを覚えています。その次は自ら船を買うなど、とにかく多趣味で、仕事にも遊びにも全力で充実した一生だったのではないかと思います。

立ち上げから、軌道に乗るまで

法人設立の際は手続きが分からず苦勞の連続でしたが、遠野土建(現:耕テラ)の事務の方に助けていただき、やり遂げることができました。業績が悪かったときは、毎月資金のやり繰りに奔走し、なんとか無事に支払ができたときには心底ホッとしたものです。

社員の皆さんへメッセージ

コロナ禍で大変な中でのお仕事、皆さん本当にご苦勞様です。皆さんが働いた結果はカタチとして、何十年先も残ります。今では86歳になった私も、若いときは現場で働いていました。そのとき造ったものが残り続けていることは誇りです。皆さんも仕事に何かやりがいや誇りを持ち、引き続き頑張ってください。

TK plus

vol.6
2021年3月25日発行